

想像力と感動

(財)リバーフロント整備センター 専務理事 砂川 孝志



ニューヨークでの9.11テロについて、アメリカの調査委員会が報告書を提出したというニュースがあった。それによれば10度テロ発見の機会を見逃した、テロにつながるといふ想像力が足りなかった。という内容であった。ずいぶん厳しい指摘である。ここまで、ハイジャックして高層ビルにつっこむところまで、想像力を働かせることは可能だったのだろうか。多分ハイジャックされるかもしれないということは想像はできるとしても。ただいったんことが起これば想像力が問われることになる。

科学の世界では一歩前進するために、仮説を立てそれを検証するという手順がよく行われる。この仮説もある種相当の想像力が必要だと思われる。それがその時代の常識からはずれているほど（かつ、うまくフィットした時）学問の前進が大きい。天動説から地動説への転換、ニュートン力学から相対性理論への転換はその変化の大きさと社会への影響は計り知れないものがあるが、その時の仮説への想像力の大きさもまた計り知れない。

時々失敗が学問の進歩を促すことがある。多くの事例があると思うが最近では島津製作所の田中さんのノーベル賞受賞のテーマがそうであったということは有名だ。実験を失敗したときにそれだけで終わらせないで何らかの想像力を働かせたことがノーベル賞の受賞につながった。

危機管理ということでは確かにどういうことが発生するかわからないので、想像力を高めてそれに対処できるようにする必要がある。河川管理、治水という点からは台風時の雨が降れば何時大雨となって洪水が発生するかもしれない、特に最近は異常降雨の発生頻度も高まっていると思われることもあるのでその可能性を念頭に入れながら対応しなければならない。

一方我々の想像力の範囲は限定される。経験、本からの情報や周りの人たちからの情報等による知識の範囲に限られることが多い。そしてそれさえも時間とともに風化してしまいがちになる。後でしまっ

たということがよくある。

これを補うのが感覚的には“好奇心”と“感動”そして“驚き”という気がする。好奇心はいわば空想の翼を果てしなく広げる源であるし、感動や驚きはそれを自らの体にながらりと植え付けるものだ。“感動”と“驚き”とは似ているところがあって自らの経験に照らしての意外性、日常の生活から少しはずれた時の感情である。ただ感動は対象が美しいもの、すばらしいものという（+）方向なのに対し、驚きはどちらかといえば（-）方向のものが対象の場合が多い。

最近、驚くことは時々あるにしても感動するということが少なくなってきた。個人的にもそうであるが社会全体としても少なくなってきたのではないだろうか。大量の情報が垂れ流される時代だからかもしれない、或いはすばらしいものが少なくなってきたのかもしれない。特に少年期の感動が少なくなってきたのではないだろうか。飛躍的に考えれば、このことが少年犯罪の増加にもつながっているという気がする。

想像力の内容という点では、特に水害対応では、感動と驚きの両方が必要かもしれない。ただ、平常時の川に対しては驚きだけではなく感動を呼び起こさせたいものである。河川管理者が川らしい景観、川らしい生態系を生み出していこうとする時、相当の想像力が必要になり、それはやはり感動が似つかわしい。

いま、人が川の姿を見て、そしてそこに生息している動植物を見て感動してくれるだろうか。川に入っていくと、こんなところに花が咲いている、こんな虫がいた、鳥が飛び立ったというような、川の姿を見て感動を呼び起こし、新たな想像力をふくらませるような川の姿になればいいと思う。そして川に何らかの手を加えた時、川の姿がどう変化し、動植物がどう変化するかを想像できるようになりたいものである。